

慈濟

ものがたり

ツーチャー 2018年7月 259



六度を行うことで 安樂を得る

●表見返し 文・證嚴法師/訳・濟運/撮影・黄筱哲

仏の教えを全て聞き入れ、
それを忘れず常時応用すれば、
頑な思いが記憶のように刻まれる。
布施を行い、その心を保ち続ければ、
戒を守ることができ、心身共に清らかになる。
忍辱和顔、柔和善順で、
さらに精進し、努力を怠ってはいけない。
静かに思い修行すれば、悪を遠ざけることができる。
本性が輝き、智慧で以て行動すると共に
誓願でき、無限の安樂が得られる。





汶川映秀鎮の漩口中学校の跡地は地震後、四川大地震の震源地として災害を銘記する所となっている。この10年以來、被災地の様子は大きく変わり、復興した。慈済志業は四川に根づき、環境保全の風潮を起こした。(撮影・蕭耀華)

目次

【社論】	衆生の善業は因縁による	慈願／訳	4
------	-------------	------	---

【静思語】	孝行は人の基本 第二卷	済運／訳	8
-------	-------------	------	---

【慈済台湾】	近所の人と共に年をとる	惟明／訳	12
--------	-------------	------	----

【特別報道 独創性豊かな匠の技】	山奥の私塾 懷徳居木工実験学校	青木芳味／訳	22
------------------	-----------------	--------	----

【衲履足跡】	菩薩法の応用	慈願／訳	36
--------	--------	------	----

【主題報道】

四川大震災から十年	黒川章子／訳	42
生命の奇跡は起きないまま	葉美娥／訳	44
あっけなく幕を下ろされた天使たち	明陞／訳	48
今と昔 命の証し	常樸／訳	52
十六歳の同級生たちを忘れない	黒川由希／訳	56
あの年の夏休み 物語は続く	黒川由希／訳	64
蘇生と再生 環境保全を広める	本諦／訳	72
エコ産業で生活の安定を図る	惟明／訳	78

【證嚴法師のお諭し】	心の方向を定め、衆生を成就させる	慈願／訳	88
------------	------------------	------	----

【書籍情報・雞婆有理（お節介の道理）】	お節介の道理・人助けのアプリ	葉美娥／訳	100
---------------------	----------------	-------	-----

慈済大事記【六月】	済運／訳	106
-----------	------	-----

衆生の善業は因縁による

旧暦の正月前、花蓮で大地震が発生した。政府とN G O が協力して支援した結果、災害による衝撃を最低限に抑えることができた。社会各方面からの声援は無限の希望をもたらし、街を復旧させる最大の原動力となった。

地震発生直後の深夜、慈済ボランティアは迅速に人々の避難先に駆けつけて心を落ち着かせる支援活動を展開し、各地のボランティアも次々に応援に集まった。さらに海外からは民族、文化の異なった慈済ボランティアが花蓮震災のために各地で募金集めと祝福活動を行った。

この世は無常であり、国土と人命は天災に脆い。幸いにも人は慈悲の天性

を持っているため、災害も「人間菩薩（じんかんぼさつ）（この世の菩薩）」を生み出す契機となっている。支援を受けた多くの被災者は生きていることに感謝し、助ける側になった。《無量義経》の《徳行品》の偈言に「慈悲十力畏れ起きず、衆生善業因縁より出づ」とある。

十年前の四川大地震は今世紀、中国大陸において最も多くの犠牲者を出した天災である。慈済ボランティアは災害発生の三日後に被災地に入ったが、物資と医療の支援が一段落した後も、台湾から行ったボランティアは毎回必ず一カ月間滞在し、途絶えることなく寄り添った。

この一年を中国メディアは「ボランティア元年」と称した。そして、数多くの人がボランティア活動に参加したことからボランティアの概念が次第に被災地に芽生えていった。現在も台湾のボランティアが常駐し、現地ボランティアに環境保全や貧困家庭の訪問ケアを指導して、長期的な慈善活動の基

礎を築いている。その五年後に起きた四川雅安地震では、現地ボランティアがすぐさま集結して救済に当たっていた。

汶川地震発生の二年後、慈済が支援建設した十三の小中学校は全て完成し、起用されている。進学第一の風潮の中、ある学校の教師は純朴で人情にあつい伝統的な教育を復活させようと考えている。たとえば、孝泉中学校は孝道を重んじ、方亨中学校は書道で名高い。両者とも慈済人文教育の理念と符合しており、一步踏み込んで慈済の「感謝の文化」を広めている。学生ボランティアは毎年、慈済大学の「川愛ボランティア隊」と交流し、毎月、両親が出稼ぎに出ており、村に居残っている「留守児童」と呼ばれる子供をサポートする「小太陽計画」に参画している。

痛みの記憶はまだ消えなくても、それは時の流れと共に沈殿してゆき、新

たな意義が生まれてくる。慈済が重点的に支援した什邡市は、七割が一人っ子家庭であるが、村落の中には家族全員が地震で亡くなったところもある。

当時、慈済ボランティアの通訳に協力した子供達はすでに社会人になったが、まだ幼かったクラスメートの面影が彼らの記憶に留まっている。彼らは前進しながら、周りの家族や友人を大切にするだけでなく、さらに助けを必要としている人々を支援しようとしている。

「寄り添い」とは困難な歳月に付き添うことである。「私たちは饅頭をこねる時に必要な水のようなもので、蒸し上がったから見えなくなる」とボランティアがたどえた。水は生命にとって不可欠であり、縁に従って丸くなる。これがボランティア精神の最も重要な点であり、また善業の源でもある。

（慈済月刊六一八期より）

第二卷

小家族



—— 家族間の孝行は美しいもの

中華文化の美しさは倫理道徳にあります。天理に適った家庭倫理、夫婦間の相互敬愛、親子間の慈悲と孝行、兄弟間の友情と礼儀。家の和はこの世の美しい天倫の情景です。

第三章

◎家庭の睦

親の手本は子どもへの家庭教育

子どもは生まれてから親を手本にし、目で見、耳で聞いたことをしっかりと覚えていきます。善良な心や穏やかさ、品のある動作は個人の修養を表しており、良い家庭教育となります。

子どもを信じる

親が子どもを過度に愛すると、逆に子どもにとって負担になります。子どもを信じて心を大きく持てば、子どもも心が安まります。



家庭を正しく管理する

お茶で客人をもてなしたり、整理や配置で礼儀作法と美的感覚を生活に取り入れるような家庭管理を行えば、家庭生活の品質を向上させることができます。

第四章

◎家庭の幸福

両親の愛

父親の愛は朝の太陽のように家庭を照らし、子どもに希望を与えてくれます。母親の愛は強く、途切れることなく、家庭のために際限なく尽くします。

出会いを大切に、別れの時は祝福する

人生には愛と離別の苦しみがつきものです。肉親と離別した時、心が留まっていはいけません。出会いも離別も縁です。出会いを大切に、離別の時は執着せず、相手を祝福してあげましょう。

幸福で穏やかな家庭を維持する

幸福な家庭を維持するには親子間の感情の打ち解けが必要です。そして、誰もが自らを律することで平和な社会を維持すべきです。



近所の人と共に年をとる

◎文・葉又華 撮影・黄筱哲 訳・惟明

老いた体が勤勉な志に追いつかないことに気づいた時、

易鄭招娣は自然と涙がこぼれた。

お年寄りの恐怖感と寂しさを身に沁みて感じた。

また、善行しながら一緒に年をとる人達が

自分の周りにいることを幸いに思った。

金曜日の早朝、七十四歳の易鄭招娣は
買い物カートを引いて市場に行き、六、

七キロもの野菜を買って帰る。そして午
後は自分の家の家事を終えると、市場で

大量に買った野菜を洗ったり食事の準備
をしたりして忙しい。家の中から数十人
分の箸や茶碗を出して、洗った後に消毒
をする。時には真夜中近くまでかかるの
で、帰宅した息子が可哀そうに思っ手
伝いに入ることもある。

日曜日の朝四時、台所からいい匂いが
立ち込める。易鄭招娣が忙しく動き回
って一品一品の手料理を作っているの
だ。そして八時近くには家を出て近所
の人達をリサイクル活動に誘う。少し
経って、息子が料理を車に積み、万大
小学校にある慈済のリサイクルセンタ
ーに運んで行く。

台北市で最も高齢化が進んでいる万華
区で、易鄭招娣が推進して始めた毎月
二回の週末リサイクル活動は、すでに
二十七年目を迎えた。一九九〇年代に慈
済が先頭に立って環境保護活動を広めた
が、ここは万華にできた最初のセンター
である。易鄭招娣は一人で始めたが、今
では近所に五十人近くのボランティアが
おり、万華地区にはリサイクルセンター
が林立している。

彼女は近所の人達がリサイクル活動に
参加するように、いつも活動日の前夜か
らボランティア全員に連絡をとってい
る。そして、活動後、感謝の気持を込め



●易鄭招娣（左）が万華地区でリサイクル活動を推進してから既に27年目に入った。一緒に活動をしてきた近所の人と共に高齢期に入った。

た手料理を皆にふるまう。
長年リサイクルを通じて、始めはお互い知らなかった住民が親しい間柄になっ

た。そして、当初から一緒にリサイクル活動してきたボランティア達も易鄭招娣と共に高齢者になった。

ボランティアの数多くは近所の主婦達である。彼女らはリサイクルするために外に出るようになり、慈済のさまざまな事務をこなすようになった。何度か易鄭招娣の後について国内外の災害援助を目的とする募金活動に参加した。まるで、本来なら一つの家庭を照らすだけの小さな蠟燭の灯がいつの間にか周辺を照らす安らぎの光となった。

リサイクルを通じて 近所同士が親しくなる

一九九一年、上人の呼びかけでリサイ

クル活動を始めた頃、易鄭招娣は両親の相次ぐ他界で受けた悲しみから、完全に立ち直っていなかった。屏東の実家から台北に戻り、隣人から手渡された慈済が隔月で発行する雑誌『慈済道侶』を読んだ、すぐ慈済台北支部に電話し、寄付を申し出た。

よく易鄭招娣の悲しみに耳を傾け、話し相手になっていたボランティアの陳雪子は、家に訪ねて来ては、助念（通夜に八時間読経する台湾の風習）などの活動に誘った。二人は姉妹のように仲がよく、易鄭招娣もますます慈済の仕事に喜びを感じた。

易鄭招娣は「一緒にリサイクル活動しない？」との陳雪子の一言に、深く考えずに引き受けたが、その後すぐ後悔した。

当時、彼女は自宅の一階で雑貨店を営んでいた。近所によく知られた雑貨店の女将さんであり、また、将校の奥さんだったので、リサイクルすることを肩合いと誤解されるのではないかと思い、心の中では抵抗があった。しかし、彼女が花蓮静思精舎で仏七修行へ仏教徒が行う七日間の修行に参加した時の、あの忘れられない上人の慈悲深い眼差しを思い出した。彼女は「困難があれば克服すればいい」と自分に言い聞かせ、後悔の

言葉を吞み込んだ。

そこで、彼女は買い物カートを引いている時にも近所の人に聞かれたら、買物に行く途中だと言い訳しようと思った。しばらく周りを見回した後、彼女は一軒一軒ベルを押して回った。すると思いがけないことに、近所の人達は彼女の呼びかけに応じて、互いに声をかけ合いながら、家中からリサイクルになりそうな物を整理して差し出してくれたのである。

いっばいになった買い物カートを引いて、彼女は早足で帰り、自宅マンションの階段の踊り場で分類を始めた。数カ月後、彼女は近所を隅から隅まで歩きまわ

り、当初感じていた抵抗感もなくすることができた。回収品はたくさん集まり、踊り場に入りきれなくなったため、近所の人達に隔週毎にもってくるようにしてもらい、分類の手伝いにも誘った。

口コミで話が広がり、定期的にリサイクル活動に参加するボランティアの人数は日増しに増えてゆき、多くの人が回収品を車で持ってきたり、近くの商店も売りに残した新聞を持ってきたりするようになった。

リサイクル活動の日になると、近所のボランティアは易鄭招娣の家の前に集合し、回収品の分類でにぎわった。近所同

士が仲良くしていることに興味を持った退役軍人のご主人は、始めは好奇心から様子をうかがっているうちに、いつしか活動に参加するようになった。

退役する前のご主人は長年駐屯地にいたので、休暇の時しか家に帰って来ず、近所の人々にとっては「客人」だったが、今ではすっかり仲間に溶け込んでいる。ご主人はいつも自分のことを「老兵」と言って謙遜し、箒で周りの掃除をしている。

まもなく易鄭招娣は雑貨店を閉め、夫婦共々慈済の活動に全力を注ぐようになった。リサイクルセンターも回収量の増加に伴い、何度も場所を変え、最終的

には万大小学校に落ち着いた。

責任である以上に愛である

雑貨店を営んでいたため本来近所付き合いがよいはずだが、易鄭招娣は内気で、人の前に出ることは得意ではなかった。しかし、勇気を出して近所の人にリサイクルを呼びかけ、集まったボランティアの世話をする責任を感じた。

彼女は晴れの日も雨の日も、娘の結婚式当日も、毎月のリサイクル活動日を変えることは一度もなかった。それは、リサイクル活動日に誰が来ても出迎える人

がいるべきという気配りからであった。それだけでなく、彼女は毎回自分の手料理を皆にふるまうほか、皆の健康に気を配った。

何年前か、あるボランティアのご主人が会社経営に失敗して負債を抱えたのが原因で、人を認知できないほど精神を病んでしまった。易鄭招娣はいつも見舞いに行き、手術の時も病院で付き添った。

七十歳を過ぎたボランティアの劉石瓊霞さんは近くに住んでいる。「なんだか気分が悪いわ……」と劉さんが言うと、易鄭招娣は手元の仕事を投げ出して、すぐに病院へ付き添った。検査が済み、劉さんの子



供が来るまで易鄭招娣は付き添った。

劉さんの子供は昼間仕事で家を留守にしているのです、彼女は一人で家にいる。易鄭招娣はいつも差し入れを持って劉さんと食事を共にし、話し相手になってあげていた。

ある年の母の日に易鄭招娣がリサイクル活動を終えた時、皆でケーキを食べ、外国籍介護者が劉さんを車椅子に乗せてやってきた。あの日、車椅子に座った劉

●月2回のリサイクル日、近所の人達は回収物資を持つてくるだけでなく、そのまま居残って分類までした。多くの人は長年リサイクル活動に参加している。

さんは皆に囲まれ、笑顔で写真に映っている。

劉さんが危篤の時、易鄭招娣はボランティアの仲間達と一緒に見舞いに行った。劉さんは易鄭招娣が来たことに気づき、易鄭招娣の肩に顔を寄せ、姉妹のように仲がよかった昔を思い出しているように、つぶやき始めた。

自分と付き合うことを学ぶ

長年、環境ボランティアの面倒を見てきた易鄭招娣は、少子高齢化が進む中、若い人達は仕事に忙しく、お年寄りが一

人で家にいる寂しさや病気になった時にパニックに陥る気持ちをよく知っている。

易鄭招娣は五年前にご主人を亡くしたが、子供たちが同居してくれた。易鄭招娣はふだんからボランティアで忙しい。暇な時間があると、昔を思い出して寂しくなつて涙を流してしまうが、易鄭招娣は忙しくてその暇もない。易鄭招娣はそのうえ、今でも自分のことを「高齢」とは思っていない。

易鄭招娣は我慢強い性格で、仕事が終わらなければ一切休憩しない。だが、老いた体は勤勉の志に追いついてゆけなくなった。ある晩、彼女は過労のため足が

ひどく痙攣した。「お産の激痛でさえ泣かなかったのに、その時は我慢できず、涙が流れました」と彼女が話してくれた。

静まり返った深夜、同居していた子供たちはすでに眠っていたが、彼女は耐え難い痛みに襲われ、ベッドの上で動くに動けなかった。やがて隣の部屋で寝ていた息子が気づき、すぐに痛みを和らげるようとマッサージをしてあげた。

あの晩の経験から、彼女は初めて自分が年を取ったことを実感した。そして、高齢者が直面している恐怖と寂しさを身にしみて体験した。

「この人生でリサイクル活動をしてよ

かった」。年をとつても世の中に貢献する機会があるのは嬉しいことだ、と易鄭招娣は言った。

取材当日、リビングルームの電話は鳴り止むことがなかった。易鄭招娣が娘と海外旅行から帰ってきたことを聞きつけて、ボランティア達が次から次へと電話をしてきたのだった。人に迷惑をかけたくないという強い独立精神をもった彼女でも、年を取る過程で多くの人が黙々と付き添ってくれている。それは、彼女が一人ひとりの環境保全ボランティアのことを心配するのと同じように。

（慈済月刊六〇七期より）

山奥の私塾（下）

懷徳居木工実験学校



都会の喧騒を離れ、山林の中に佇む木工学校を散策する。
都ここ懷徳居は、創設者林東陽氏と木工教師たちの夢の結晶である。
木工技術指導を行うばかりでなく、デンマーク家具の手作りの精神も伝承している。
より多くの人々に手作りの家具の美しさを知ってもらいたいと願っている。

文・葉奕緯（「經典雜誌」記者） 訳・青木芳味 撮影・安倍渥（「經典雜誌」撮影主査）



デンマークの工芸精神

二〇〇二年に日本で初めてデンマークの家具に出会った時、これこそ私が探し求めていた家具の模範であると思いました」と、林東陽氏は嬉しそうに語る。

「清朝家具は細工が細かいけれども複雑で型にはまったものになりやすいのに対し、洗練されたナチュラルなデンマーク家具は、人の心を感動させることのできる作品です。デンマーク家具はデザインナーと木工師のチームワークにかかっていて、いすの背もたれ、肘掛、脚といっ

た椅子の三大要素だけで、他にない個性的な椅子を創り出すことができ、この点において明朝スタイルの簡潔で構造が厳格に決まっている家具とはまた違った素晴らしさがあるのです」

林東陽氏は初め、デンマーク家具はきつと全て手作業で作られているのだらうと思っていたのだが、デンマークのある学校を訪問した際に驚くべきことを発見した。なんとその学校の一階にはコンピュータ数値制御（CNC）の工作機械など、様々な先進的設備が並んでおり、想像していた手作り家具で有名なデンマークとは異なっていたのだ。続いて二階

へ進むと、何十年もの歴史ある古い作業

台の上でノミで削り、カンナを掛け、ノコギリで切る学生たちの姿が目飛び込んできた。つまり、自動化設備は木工職人が「完璧」な作品を作るための助けにはなるが、それらはあくまでも単なる補助器具であって、もしも両手を使ってデ

イテールに工夫を凝らすことをしなければ、せつかく持っている技術が無駄にすることになる。これこそが、懷徳居では各メーカーから提供された様々な設備があるにもかかわらず、学生たちは最も基本的な手道具から学び始めなければならぬ理由であり、これはデンマークの手

作り精神を手本にしたものなのである。

また、林東陽氏は画一化された学習指導要綱や教科書および授業進度を捨て去り、各学生のレベルに合わせた学習目標の設定を行っている。それゆえ、学生たちが作る作品はそれぞれまったく異なったものになる。

「君たちの手を訓練して、君たちの頭のように賢くしてやろう！」。赤い作業服に身を包み、両腕の太く逞しい森平房先生が、教室内の二十数名の学生たちを力強く励ます。

森平房氏は語る。「私は授業以外の時間に創作をしていて、アトリエを持って

木工教室の手作りの現場

● パーツに正確にノコギリを入れる。ノコギリを入れる方向によって縦挽きと横挽きに分かれる。(下)



● 学生に継ぎ手の技法を説明する森平房氏。継ぎ手をする際は時間をかけてパーツの寸法を合わせる必要がある。木工学習の基本技能である。(右)

● 糸鋸盤を使用して穴を開ける。(下)

● 金属製直尺でパーツの幅を測定する。(左)



います。これは全て懷徳居のおかげです。以前のように会社で働いていたのでは、新しい作品のアイデアを生み出す時間もありませんから」。また、次のように続ける。「一般の大学と懷徳居の教育現場は大きく異なります。大学生は単位取得のために学びますが、ここでは主体的に学びます。懷徳居の学生たちはいつも私の説明に熱心に耳を傾け、いろいろな質問をして、私の中から学べるものを探し出そうとするので、教える立場の私も能力が試され、とてもやりがいを感じます！」

「ここにはちよつと変わった学習方法

授業で先生はノミで削ったり、カンナをかけたり、ノコギリで切ったりという手道具の使い方を教えて、私たちの手に感覚を覚えさせます。これはカメラマンがまず暗室の原理を理解してからデジタルカメラを使い始めるのと似ています。機械はとても便利ですが、原理はやはり手の感覚でなくてはしっかりと覚えることができないのです」

林東陽氏は誇らしげに話す。「懷徳居出身の学生は絶対に仕事で手を抜きません。彼らは釘を使って木材を繋ぎ合わせるといふ手軽な方法を選ばず、あえて継ぎ手という複雑な手段を用います。また、

があります。学生の内の誰かが何かの問題にぶつかった時、先生は皆を集めて一緒に答えを考えさせるのです。先生方は私たちが自分の作品のことを知るだけでなく、仲間たちの作品のアイデアや問題を通して、木工家具全体を広く知ってもらいたいと願っているのです」と淡江大学建築学科の学生、黄凱祺は語る。

「私の父は一生大工として働きました。父が亡くなってから、私は父の古い道具を懷徳居に寄付し、私もあちらこちらを転々とした結果、今ここに来て一から学び直しています」と、髪の毛真っ白な学生、李正順が思い出を語る。「最初の六回の

● 原木を繋ぎ合わせて作った自転車フレーム。
(図・懷徳居提供)



●一枚の原木材とシンプルなお茶台脚によって
禅を表現したティーテーブル。フロアスタン
ドライト。台座部はクルミの木を接ぎ合わせ、金属
ネット越しに光がこぼれる。(写真・懷徳居提供)

流行に合わせてたりすることもしません。
なぜなら彼らはデンマークの椅子が一つ
一つ違うように、一人ひとりがオリジナ
リティ溢れる創意工夫の精神を有してい
るからです」



伝統木工芸術の消失

林東陽氏はたびたび台湾とデンマーク
を並べて比較する。デンマークの国土面
積は台湾の一・二五倍で、人口は台湾の
四分の一。しかし平均所得は台湾の三倍
もある。台湾では産業の海外移転がたび
たび聞かれるが、デンマークにはそれが
ない。それはなぜか。

林氏は、台湾の機械による自動化大量
生産指向が台湾の民芸消滅の危機を早め
る原因となっていると考える。台湾では
清朝統治時代に中国大陆からの移民が商
いをしていたため、福建や広東などの各

種様々な家具が出現した。大陸から来た
職人たちは材料の選定から継ぎ手の構造、
塗装などといった製造方法に大変なこだ
わりを持っていたが、後に港が開かれ海
外との貿易が行われるようになると、さ
らに西洋家具の美意識ももたらされた。

日本統治時代中期になると、ノミ、カ
ンナ、ノコギリなどの手道具に加え様々な
木工機械も使用されるようになり、それま
での複雑な製造工程が次第に簡略化され
ていった。そして国民政府が台湾にやっ
てくると、グローバル化と工業における効率
化の影響はいつそう強まり、家具の製造技
術はよりシンプルさが求められるように

なった。手間暇のかかる伝統技術は、今まさに姿を消しつつあるのである。

戦後再建における工事や建設の需要もまた、台湾の機械への依存をさらに深めた。続いて、職業学校に木工人材を育成する学科が現れたが、学生たちは卒業すると、そのほとんどが工場に職を求めた。人件費が安いうえ機械による自動化生産を行うため、台湾における外国向け家具の受託生産数はピークに達した。こうして台湾は「家具王国」の名を手に入れたのであるが、伝統的な工芸の真髄はすでにその大半が失われていた。

一九九〇年、台湾の産業形態が変わり、

エレクトロニクス産業が伝統産業に取って代わったため、多くの職業学校が木工学科を室内デザイン学科に変更した。また、樹木伐採禁止政策や中国の外資導入などを受け、家具業界の川上および川下の工場は次第に中国投資に転じ、木工業に携わろうとする人はほとんどいなくなってしまう。

「家具をひとつの生活必需品として、台湾はこれまで機械を使用して単一化、規格化された家具を作り、経済性を追求し、時代のニーズに対応してきました。現在国民の所得は向上し、家具に美しさやデザイン性を求めるようになってきま

した。やっと手作り家具に新たな道が開かれたのです」と林東陽氏は語る。

そのため、林氏は懷徳居創設以外に、今年から「木師教堂」の建設も開始する。木師教堂は教会ではなく、「木工教師教育の殿堂」である。林東陽氏の木師教堂建設の狙いは、木工を庶民の間に普及させ、国内で深く定着させることにある。もしもあと百人の人により教育を提供することができたなら、そこから広がって百世帯の家庭に影響を与え、手作り木工家具をより多くの人々の生活の中に浸透させることができるかもしれないと考えたのだ。

三峡の台北大学もちょうど、こうしたら三峡で有名な藍染や鶯歌の陶磁器や大溪の木製家具などの地元産業を教育内容に結びつけることができるかを考案、計



●左図は学生が創作したサイドテーブル。(写真・懷徳居提供)

●林口の実家を改造した家具知識館内に座る林東陽氏。壁には彼の父が若かりし頃にしたためた一対の句と横書きの標語が掛けられている。ここはすでに十三年間にわたり、木工職人たちを育てるゆりかごとなっている。

画中だった。そして半年間の話し合いの結果、台北大学は林東陽氏と協力することを決め、五百五十坪の土地を用意して木師教堂の建設地とすることを申し出た。懷徳居は三千五百万円の経費を調達して建築や機械設備の必要に当てることとなった。この度の双方の協力を通じて、手作り木工家具がより多くの人々に知られるようになることを願う。

「今ぶつかっている最も大きな問題は経費不足です。資金があと一千万円近く

足りません。かつてアメリカで勉強していたときに気づいたのですが、アメリカ人にとって、自分がよいと認める実施プロジェクトに寄付をしてサポートするのはごく一般的な行為でした。けれど台湾では、政治や宗教に比べると教育事業に対する人々の関心は全体的に薄く、私は今も寄付金集めに頭を悩ませています」と林東陽氏は語る。

新世代における木工の意義

林氏は次のように語る。「三十年前、皆はこの県道一〇六号線を自転車に米や荷物を載せて走っていました。その頃の

自転車の主な用途は荷物の運搬だったのです。けれど、今県道を走り抜ける自転車は、そのほとんどが運動や健康のためのサイクリングが目的となっています。実は木工というこの業種も同じで、生活のために必要な技術から趣味へと変化したのです」

今日の台湾において、木工を学ぶことは自転車に乗ることと同じように、新世代の人々の「ロハス」の代名詞となっている。木工という昔ながらの仕事が今徐々に古い枠から抜け出して、職人の仕事から芸術活動へと変わりつつあり、台湾に木工芸術復興の風を巻き起こしているのである。（経典雑誌二二〇期より）





菩薩法の応用

◎文・釋徳仇／訳・慈願

「如是我聞^{によぜがもん}（かくの如く我聞けり）」
という出だしで始まる經典を
深く研究するだけでなく、
世界の脈動を掌握して群衆の中に入り、
広く良縁を結ばなければいけません。

心田の雑草を取り除く

大林慈濟病院の幹部と職員が二泊三日の精舎修行生活を体験しました。職員は尼僧たちと田んぼの除草やウコンを掘り出す

作業を行い、農耕の難しさと尼僧たちの日頃の苦勞を体得しました。彼らは忙しい日々の中で「修行休暇」の機会を得て、身は疲勞を感じても心は充実し、喜びを感じていました。

證嚴法師は開示の時、出家する前はよく慈雲寺で常住尼僧たちと田んぼの草取りをしていた話をされました。一面の広い水田でこちらの端から向かいの畔まで、かなりの時間をかけないと草取りは終わりませんでした。そこで「大学の道は明らかな徳、親民は至善」と心の中で復習しながら、手は休まずに一本一本の雑草を取っているうちに、經典をすっかり暗記することができました。

法師は「私は慈雲寺の野良仕事が好きでした。家を離れて修行を始めた後、自力更生し、心に何の負担もなければ、自然と雑念はなく、理に正しく天下の人のため、天下の事を為すこと



を立願しました」と言われました。

法師はまた、次のように言われました。「天下の事は一人あるいは少人数で成し遂げることはできず、大勢の力が必要です。慈済の四大志業も慈善志業に始まって、多くの人の愛の力が寄り集まったことによって、社会の人々のニーズに応えて良能を発揮することができたのです」

法師は医療志業を発展させたことについて、慈善訪問をしている中で、「病が故の貧」や「貧が故の病」に気づき、一家の大黒柱が病に倒れたために生活に支障をきたしたり、あるいは貧しいがために医者にかかれず、小さな病が重病になっていったことが原因だと分かったのです。それゆえ、慈済病院の使命は非営利組織であって人の命を救うことにあるのです。

大林慈済病院は田舎にあって、年輩の患者が非常に多いので

す。法師は職員が共感を以て心から彼らをいたわると共に、生命と健康、愛を護る使命を一身に担い、その使命と精神を永遠に維持していくことを願っておられます。

「皆さんがこの純朴な雲林・嘉義地方を喜んで護る真心は法脈と連結していなければいけません。ですから時間を見つけて精舎に帰り、そして法脈慧命の家から、再び法悦を病院に持ち帰って慧命を延續させて欲しいのです」とおっしゃいました。

如来の家業を担う

三月十日と十一日に、今年度（旧暦）初の委員及び慈誠隊員の精進研修会が開かれました。台湾全土の一万四千人のボランティアが十六カ所の慈済道場で同時に精進しました。また、中



国、マレーシア、ニュージーランド、フィリピンなどの慈濟人約二万人がインターネットを通じて、台湾とつながり、共に精進しました。

国内外の弟子の齋戒精進を喜びと共にご覧になった法師は、皆が法を聞いて心に留め、智慧と道心を高めることで、容易に無明の言葉に心を乱されないようになることを期待しています。また、「如是我聞の仏典文字を深く研究するだけでなく、世界の脈動を掌握し、群衆に分け入って菩薩道を歩んでこそ、広く良縁を結び、衆生済度を行うことができるのです」と言われました。

「仏陀がお教えになった菩薩法は濁世で応用すべきです。現代の世においては人心を正確な方向に導く人間菩薩がとても必要です」。法師は、慈濟人がコミュニティーや社会で絶えず善法を伝えることで、一人でも迷いから目覚めて正しい道に戻れば、

それだけ社会に危害を及ぼす人が一人減り、社会に貢献する人が一人増えることになるとお教えになりました。

「一般の人の仏教道場に対する印象とは異なり、自分には信者はなく、弟子があるだけ。どの弟子の心にも師匠がいて、師匠の人生には世界中の弟子たちがいます」とおっしゃっています。慈濟世界は天下の大家族で、静思精舎は慈濟人の心の故郷ですから、精舎に来ることは『帰る』ことなのです」

「弟子たちが本当に如来の大家庭に入って、家業を担うことを願っています。皆が時間無駄にせず、今の人生を使って慧命を伸ばすよう期待しています」と念を押しました。もしも二日間、精進研修に参加した二万人近い慈濟人全員が精進の心を永久に保ち続け、菩薩の種を一粒から無量に増やせば、社会の平和を達成させることは困難なことではありません。

(慈濟月刊六一八期より)

四川大震災から十年

◎企画・李委煌 文&撮影・蕭耀華 訳・黒川章子

発

生から十年が経過し、私は再び汶川にたどり着いた。世界中を驚かせた大地震の震源地である。二〇〇八年五月十二日午後二時二十八分、四川省汶川では地面が寝返りを打って天地を揺らした。その威力は海の方こうでも揺れが感じられるほど強かったようだ。三日後に私は台湾を出発し、慈済ボランティアと共にこの場所に降り立った。周囲を山でかこまれた被災地周辺では、外部と繋がる道路が壊滅していたので、救助隊

はヘリコプターを使うか、二、三日かけて徒歩で山を越えるしかなかった。地震の被害は広範囲にわたっており、慈済の支援団体はその中でもとくに被害が甚大だった徳陽市、洛水郡、綿竹市を拠点に定めて支援を行い、学校と住宅の再建、地域への寄り添いケア、リサイクル活動の呼びかけに努めた。そうして始まった四川省への支援志業は十年後の現在も続いている。

（慈済月刊六一八期より）



●汶川の映秀郡漩口中学校は震災を語り継ぐ遺跡に指定されている。この震災により被災あるいは行方不明となった人は合わせて86000人、被災地域は10万平方キロメートルという台湾の3倍の面積に及んでいるという。

生命の奇跡は起きないまま

私はカメラを手にして、崩れた建物の瓦礫の山にしゃがんで、ハゲワシのように静かにして獲物をじっと待っていました。目の前には南京消防機構から派遣されてきた救助チームが散らばっている建物の前に立って、いろいろな方法を模索していました。彼らはあちこちの隙間を探して、中の様子を調べたかったです。

私も彼らと同じように、匂いに引き寄せられてきました。魂が抜けた状態のまま、何日も空気に曝されて放出されたま

まの異臭が鼻につきました。台湾の中部大地震後の被災地、中寮（台湾の南投県）、イランのバム地震の被災地、インド洋津波の後のスリランカの海岸もそうでした。その匂いは一度嗅いだら一生忘れられません。消防士出身の救助チームは、当然そのような経験もあるはずですから、みんなに知らせなくても、その匂いに引き寄せられて被災現場に辿り着きます。

二〇〇八年五月二十一日、中国四川の



汶川大地震から十日目、私は被害がひどかった地域の一つ、什邡鑒華地區を歩き回っていました。毎月二十五日、「慈済月刊」が刊行される前に、今回の地震を象徴する場面をカメラに収めたいと考えていました。この世紀の地震が話題になった時に人々が真つ先に思い出す場面のことです。

被災地に滞在して一週間が過ぎ、元々の予定なら台湾に戻るべきなのに、今回の震災報道や写真について何か物足りない気がして、帰国をもう三日間伸ばしました。雑誌を刊行するまでに「被災地の実情が伝わる」写真を撮りたかったからでした。

見るためです。

私の期待は空の色と同じようにどんどん暗くなり、焦りへと変わっていきしました。慈済ボランティア送迎車隊が近くについて、四川の成都に戻る時間に遅れないようと私を待っていた運転手が横に来て、車に乗るよう促していたのです。

翌日、慈済ボランティア送迎車隊は四川の成都から一気に洛水に入って、被災地の住民に炊き出しや無料診療を提供していました。みんなそれぞれの仕事が始まった後、私は運転手に頼んで、もう一度鑒華の被災地に送ってもらいました。今回の自分の役割を遂行できるようにと祈りながら。

思いがけず被災地は前と全く変わって

目の前の救助チームが努力してくれること、それが私の最後の希望です。彼らが生命の兆候を探し出し、担架で倒壊した建物の隙間から生存者を運び出したところをレンズで捉えることができれば……。しかし、あの匂いはそれが希望にすぎないことをすでに私に教えていたのです。

時間が刻一刻と過ぎ、救助チームは瓦礫などの障害物を取り除く方法が見つからず、どうにもならないままでした。何人かが倒壊した建物を囲み、油圧ショベルで倒壊した建物の周囲の撤去作業をしたり、溶断機で鉄骨建築の鋼材を解体したりしていました。少しでも目の前の隙間を広げて、倒壊した建物の中の様子を

しまいました。昨日私がしゃがんだ所や救助チームが走り回った所は、倒壊した建物や瓦礫の山などが一晩で撤去され、その代わりに広い平地になり、ほこりが残ってはいましたが清掃されて、バスケットボールができるような状況でした。

救助チームはすでに去り、埋められた廃棄建物もなくなっていました。私はあきらめずにその近くで倒壊した建物の中と外を探し続け、最後の数時間で奇跡の命が発見できるようにと望んでいました。

二日後、二〇〇八年五月二十四日、私は台北で被災地を収めた四千枚近くの写真を整理していましたが、あの瓦礫の山に埋められてしまった奇跡と希望はやはり見つけることができませんでした。



● 什邡紅白鎮中心小学校 2008・05・18

◎ 文 & 撮影・蕭耀華 訳・明陸

止まった時間

あっけなく幕を下ろされた天使たち

子供たちが逝ってしまった。突然逝ってしまった。ランドセルを持っていく時間さえもなかった。さらに、両親にさよならを言う時間もないままに……。

二〇〇八年五月十二日、世界を震撼させた天災が発生しました。中国四川省汶川県で、その日、瞬時に天地がひっくり返るような地震が起きた時、その地響き

は遠くの台北でさえも感じられました。
六日後、私は四川省什邡市の紅白鎮に
いました。紅白鎮と汶川との間は大きな
山に隔てられ、直線距離にすると約百キ
ロ離れた小さな村です。目の前の美しい
景色は見る影もなく変りはてて、小学校
はなくなっていました。校内から響く笑
い声はなく、子供たちもいなくなり、た
だ残っているランドセルだけが彼らがこ
こにいたことを証明しています。天地に

慈みなく、天も天命を授けることなく、
子供たちは両親の期待を一心に背負って
この世をさっと駆け抜けた後、神様の指
示によりあの世へ行ってしまうました。
この時の中国はまだ一人っ子政策を厳し
く実施していた時代でした。
物事は、一たび起きてしまえばもう元
には戻りません。時間は過ぎると過去に
なってしまうますが、悲しみはいつまで
も残ります。（慈済月刊六一八期より）



●紅白鎮中心小学校は児童約200人のうち半数以上が犠牲になった。
現在学校は公園になっている。

● 什邡 2008・05・18

◎ 文 & 撮影・蕭耀華 訳・常樸

今と昔 命の証し

その赤ちゃんは、母の体内から出てまだ四日目で柔らかく、何事が起きたのかはつきり知らない。母親はその赤ちゃんが生まれる三日前に、世界を震撼させた中国四川の大地震が発生した直後の瓦礫の中から救助隊に救出され、すぐに医療センターに送られ、幸いにも生き残ることができた。

二〇〇八年五月十八日、地震後七日

目に私が行ったのは、四川省什邡市の空き地にあたかも野戦病院の如く設けられた緊急医療ステーションで、そこで四十五歳の楊啓菊とその赤ちゃんに出会った。什邡市は、前代未聞の大地震に襲われた最も深刻な被災地の一つであり、目にしたのはまるで戦争後の情景のようだった。民家、病院、学校、工場、交通道路、公共の建築物、死傷





●洛水中学校はほぼ全壊し、犠牲となった生徒の家族にとって辛い思い出とならないようにとの配慮から、学校をほかの所に移した。今では洛水衛生センターになっている。

者などの損失は統計する術がない。しかしながら、民衆はこの無力の時に人間性の光明をかい間見た。

中国の各地、そして外国の団体あるいは個人が、救援物資を携えて被災地に集まった。

彼らは夜を日に継いで不眠不休のまま、限られた道具を手に、地面がまだしっかりしていない被災地で蟻のように奇跡や希望を探し回ったり、魂の抜

け殻のようになった被災者に寄り添ったりしていた。

今回の地震による悲しい離別の物語は、数え切れないほどある。一瞬にして無数の家庭が粉々に打ち砕かれた。しかし、おしつぶされても人間性の奥には情がある。そこに真の情が見られた。楊啓菊と赤ちゃんの話はその情の証である。私はカメラでその存在を確かに記録した。

洛水中学出身の私

◎文・樊彩云 撮影・蕭耀華 訳・黒川由希

十六歳の同級生たちを忘れない

被災地では、この十年間で何もかも変わってしまったかのようだ。

では私自身は？　そして同級生たちは？

十六歳の姿のまま、別の世界に生きているのではないだろうか。

私の少女時代は彼らとともに去って行った。

多くの人の生命と引き換えに成長した。

この後の人生をより良く生きていかなくてはならない。

十年は長い。いつの間にか髪に白い物

が混じるようになった。十年は短い。な

じみのある声を聞くと、慈濟人が帰って

行ったのは、ほんの昨日のことのような

気がする。文字にはいつも思いやりがあ

ふれている。慈濟人が残っていたカー

ドに書かれた言葉を見るたび、胸が熱くなる。人は感情を持つ動物で、感情の絆が切れることはない。

ではなぜ私は地震について触れたくないのだろう。その後知り合った友人の前では自分が地震を体験したことをほとんど話さない。過去を忘れたということだろうか。

先週、台湾から来た慈濟ボランティアに付き添い、今は病院となっているかつては廃墟だった学校へ行った。壊れかけていた家屋も新しくなり、荒れ果ててい

●樊彩云の母校洛水中学校は、今は病院となっている。



た街も活力を取り戻している……。この十年で変わっていないものなど何もないようだ。

では私自身は？ この十年で変わったのだろうか。少女が花嫁となり、学生が教師となり、全ては良い方向へ進んでいるようだ。

これまで眠れぬ夜に何度も何度も、あの日私を生かしてくれたことを神様に感謝してきた。私のあの同級生たちは、十六歳の姿のまま、別の世界で楽しく暮らしているのだろうか。

この十年間、彼らの笑顔や話し声を思い返す勇気はなかった。今でも彼らはど

こかに生きていて、ただこの十年間連絡を絶っていただけのような気がする。

清明節のお墓参りで、彼らの笑顔の写真を見るたびにこう思う。「みんなはいね。いつまでも若いままで。私たちが時間が時間に引きずられて、こんなに遠くまで来てしまった」

より良く生きる

地震の起きたあの日、多くの生命があっけなく失われた。小さな、柔らかな身体は鉄筋コンクリートに押しつぶされ、生命はこうして止まってしまった。

本当に止まってしまったのだろうか。

それとも別の形で存在しているのだろうか。痛みが時の流れと融合すると、不可思議な形で表れる。

地震後すぐ、私たちは子どもを失った家庭へ行き、彼らの傷ついた心を慰め、道で会った時も家族のように挨拶した。

徐々に、またお腹が大きくなる人や、故郷を離れる人も現れた。再び会った時にも目を合わさず、やがて知らないふりをするようになった。

きつと痛みを忘れ、新たな生活を始めたのだろうかと思つた。彼らの子どもたちと同級生だった私たちの存在は、

苦痛を呼び起こすスイッチであるに違いない。

子を思い、どれだけ夜中に人知れず泣いたのだろうか。新しい生活を始めるため、どれだけの力をふりしぼらなければならなかっただろうか。これらは全て、経験した人にしか分からないことだ。

では、私たちの生命はどうだろうか。死に向かつて生き、自らを反省する。天地がひっくり返るほどの変化が起きたのかもしれない。あの一晩で成長し、生命が強くなり、少女時代は彼らとともに去って行ったようだ。生き残った人は、苦しみの泥沼の中から、自分だけの花を

咲かせたのである。

あの年、足を負傷した女の子は軍人と結婚して子どもを生んだ。災害時に頼もしかった軍人に恩義を感じたのかもしれない。またあの年、大腿を切断した男の子は、学校に通わなくなり、自暴自棄の数年を過ごしたが、しかし最後には同じように車椅子で懸命に生きる少女と結ばれた。新たな人生の意義を掴んだ彼はもう孤独ではない。

これらは全て生命の強さである。多くの人の生命を糧に成長したのである。私たちはより良く生きねばならない。この生命は神様から預けられたものなのだから。

余生を大切にする

自分の生命の意義は何だろうかとよく問いかける。慈済人はよく「一日に朝は二度来ない」という。よりいつそう人に奉仕するためにこそ生きているのである。人がこの世に存在するのはわずか数十年。数十年後には霞のように消えてしまう。だからこそ私は人により奉仕し、自分に責任を負い、人生を価値があり、意義のあるものとし、善良に尊厳を持って生きたいのである。

震災支援が終了すると、多くの慈済人は帰って行き、私も学校に戻って勉強を



続けた。慈済人が恋しくなると、私たちがかつてボランティア活動をしていた場所に行った。あの小川の川辺で、師姑^{スーグー}、師伯^{スーボ}が「人生は小船のようなもの、何もかも乗せることはできない。捨てることを学び、忘れることを学ばなくてはならない」と教諭してくれた時のことを今でも覚えている。

その後私は師姑、師伯からもらった靴を履いて、様々な場所へ行き、たくさん

●震災後慈済は徳陽の3つの県・市の5カ所に支援ステーションを設立した。樊彩云（前列右から2番目）ら子どもボランティアが洛水の慈済医療センターで記念撮影。（撮影・黄福全）

四川大地震

時間：2008年5月12日・月曜日・14時28分04秒
震源：四川阿壩州汶川
規模：マグニチュード8.2
被災状況：死者68712人、行方不明者17921人、
家屋倒壊21万6千棟、うち6898棟が学校校舎。

の風景を眺めた。「彩云、あなたが困難にぶつかっている時、私たちはきっと地球のどこかであなたのために祈っていることを忘れないでね」と、慈済人が私にかけてくれたこの言葉がいつも胸の中にあつたからこそ、慈済人から受け継いだ善良な心を持って、私は生活上の様々な困難に平静な心で向き合ってきた。

過去の苦しみや苦痛を忘れることはで

きない。ならばそれらを背負っていこう。それは人生の旅路で寂しさを紛らわせてくれもするのだ。慈済人が私に残してくれた思い出は、私がこの世界と向き合う際の慰めであり、支えである。またそれにより、私は生活の中の真善美に日々感謝し、誠実に奉仕することができる。残された人生を、善良な人間として生きていきたい。（慈済月刊六一八期より）

子どもボランティアを思う

◎整理・編集部

五月十二日の大地震発生後、五月十四日より慈済ボランティアは徳陽市管轄下の羅江県金山鎮、什邡市洛水鎮、綿竹市遵道鎮と漢旺鎮に赴き、災害援助サービ

ス拠点を次々に設立した。彩云の通う洛水中学校では、昼休み後に発生した地震により、全校で生徒と教師百人近くが死亡した。彼女も家族や友人を失ったが、それでも恐怖心を捨て、積極的にボランティアに参加した。

昼間、彼女は慈済物資集中拠点で手伝いをし、ずっしり重いミネラルウォーターや米を運び、人手が足りない時には夜中まで残って手伝ってくれた。四川の方言の分からない慈済チームのため、医師の診察の際、通訳をしたり、温かい食べ物で一人暮らしの高齢者に届けたり、ボランティアと共にテントを訪ねては人々を慰めたりした。

こうした「子どもボランティア」は、救難救助の際の重要なサポーターであると同時に、当時震災支援に参加した慈済ボランティアが最もその身を案じる存在でもあった。

五月十六日より物資配付を始め、八月十二日に住民が仮設住宅に入居するまで、慈済は被災地に八十九日間留まり、延べ八千九百名以上のボランティアを投入した。その後、一万九千戸の仮設住宅の住民に入居祝いを贈り、寺と学校の臨時家屋を建設し、希望工程校舎十三カ所、大愛村永久住宅一カ所を建設支援した。

ボランティアの視点

◎文・周豊 訳・黒川由希

あの年の夏休み物語は続く

十年前、四川省での夏休み、人々が団結して共に困難を乗り越える勇氣と信念を目の当たりにした。そしてまた助け合い、融和、友愛を、多くの人が求めていることを実感した。

十年前の夏休み、私は数人の他校の学生と共に四川省綿竹でのボランティア活動に参加し、テントの学校で子どもたちに勉強を教えた。「どこかで災難があれば、八方から支援する」、現地の人に微笑みかけ、抱きしめるだけでも意義がある、当

時はそんな単純な考えを抱いていた。

余震が続いていたため、私が被災地へ行くのに対して家族は「迷惑をかけるだけだ」「悪趣味だ」とあまり賛成していなかった。しかしそれでも私は汽車の切符を買い、山西省中部の小さな町にある

実家から二十時間以上をかけてついに四川省にたどり着いた。

廃墟となった被災地に、私は二十日間近く滞在した。様々な国や地域から来た様々な職業の人々に会い、多くのNGOや建設支援チームが道路の補修や仮設住宅の建設に従事しているのを見た。

その時の感動や衝撃は永遠に忘れることはできない。大自然の災害の前で、人はあまりにも小さく無力な存在だ。しか

●四川大地震の被災地・鎰華鎮では、地震による傷跡があたり一面に広がっていた。地震により2万キロメートル以上の道路が被害を受けたが、それでも国内外のボランティアたちは様々な困難を乗り越えて援助のため被災地に入った。

(撮影・蕭耀華)



し、人々が心を一つに団結し、共に困難を乗り越えようとする勇氣と信念に、私はぬくもりと力強さを感じた。

太古の昔より、人類は様々な自然災害に向き合ってきた。私たちの祖先が創り上げてきた文明や文化はどれほど尊く、貴重なものだろうか。諸行無常、私は人生の意義や価値を考えるようになった。人は何のために生きているのだろうか。日常生活の小さな悩みなど、悩みのうちに入るのだろうか。

後に私は多くの公益活動に参加するようになり、この世界には、友愛や善を認める人々がやはりたくさんいるのであり、そしてまた大半の人が、平和や融和、

助け合い、より良い生活を求めているのだということを徐々に認識した。

台湾の友人

四川省でのボランティアに参加する前、私には台湾の友人はいなかった。子どもの頃、台湾の歌手・鄭智化の歌を歌うのが好きだった。「情熱的な太陽が顔を出し、大地はどこまでも緑が広がる。椰子の木が優しく揺れ、白い雲が青空に悠々と漂う……美しい南台湾、一晩ここに泊まったなら、明日帰るのが嫌になる……」。南台湾の美しさに、私は憧れを抱き続けてきた。

四川省でボランティア活動をしている時、台湾から来た慈済ボランティアの青年に出会った。私より何歳か年上で、私の好きな『未央歌』や『紅樓夢』などの文学について話をする、彼もそれらが大好きであることが分かった。それから伝統文化や兩岸の若者についてなど、たくさん興味深い話題を話し合った。こうして友達付き合いをすること十年、時々連絡を取り合うたび、私の心は温かくなった。

さらにもう一人、桃園から来たという上品な白髪交じりの六十代のボランティアは、朝から晩まで休まず働いていた。鍋を洗い、調理用具を整理し、掃除をす

る女性を見て、私は思わず「どうして休まないんですか」と問いかけた。

「休暇を取って、飛行機に乗って、ようやくこの遠いところにまで来たのだから、当然一分でも多く役に立つことをしないとイケないわ。やればやるほど私は嬉しいの。四川まで来たのも無駄じゃなかったと思えるのよ」という女性の答えを聞いて、時間を惜しんで有意義なことを少しでもたくさんすることは、決して何か損をしているのではなく、機会を無駄にしないということなのだと思った。

テントの学校のある日の昼休み、突然銅鑼や太鼓の音が鳴り響いた。現地の村の共産党委員会幹部や小学生たちが、台



湾海峡の対岸から来た人々へ心からの感謝を伝えるため、慈済ボランティアに錦の旗を持って来たのである。人々の真心に私は感動し、目頭が熱くなった。

四川省だけでなく、慈済は中国や海外の多くの地域で黙々と公益活動に従事している。こうした公益活動ではすべてボランティアが仕事の合間を縫って、自ら調査し、家庭訪問をし、リストを作り、現地の住民に物資を配付しているのである。その期間の食費や宿泊費、交通費はすべて自前であり、見返りを求めることはない。

慈済ボランティアと触れ合う中で、私はたくさん良い友人ができた。彼らは

皆社会奉仕を積極的に実践する若者たちで、私は視野が広がり、素晴らしい世界をつくるという信念も強まった。それにつれて自分の気持ちも明るくなっていくようだった。

この世には真心がある

この十年間、北京で就学している時も、卒業後上海で働いている間も、私は現地の慈済の活動に参加した。ある時ボランティアと共に蘇北地方の貧困家庭の生徒たちに奨学金を届けに行った。子どもたちは皆可愛らしかったが、彼らの家を訪ねて初めて私は農村の生活条件の厳しさ

を知った。彼らの家庭には家具や家電はあまりなく、上海や北京の生活との差はやはり大きかった。

貧困家庭の子供たちが知識で運命を変えようとしても簡単なことではないと感じた。学校へ通いたいという子どもたちの夢の実現を助けることができれば、非常に大きな意義がある。現在、私は社会人になり、生活の質を向上させると同時に、子どもたちが物質的不足のために学校をやめなければならないという状況を

●震災後50時間で慈済ボランティアは四川省に入り、万難を排して綿竹漢旺、都江堰市などの地で災害調査を行った。あたりには荒涼とした雰囲気漂っていた。

(撮影・蕭耀華)

なくすよう、彼らを助けなくてはならない。一人の力は小さいが、皆が共に努力すれば、多くの人の運命を変えることができる。

慈済ボランティアに参加する中で、私は日常生活の中なるべく欲望を捨て、儉約し、生活を大切にし、また智慧をもって生きることを学んだ。そして因縁に従い、地域のボランティア活動にも参加した。形式は異なるが、どれも本質的に奉仕であり、愛の心は同じであると感じた。

しかし慈済の効率性と国際化は素晴らしいものである。私たちはメディアを通

してアフリカの貧困やシリア内戦による被害を知るが、実際の状況はもっと深刻なものに達しない。現地に直接赴き援助を行う慈済人に私は感銘を受けると同時に、彼らを誇りに思う。

十年が過ぎた。思い返せば、あの夏休みの決断により、私はたくさんのもを得た。また、より平和を愛し、感謝の心を持つて暮らすようになり、家族や先生方、同級生、友人に感謝し、私たちの穏やかな生活を支えてくれている名も知らぬ人々に感謝するようになった。

インドの哲学者、タゴールのこんな詩を思い出した。「かつて夢のなか

で、わたしたちは赤の他人だった。目を覚まして、おたがいに愛しあっていたと気づく。(Once we dreamt that we were strangers. We wake up to find that we were dear to each other.)」日々はこれからも続く。一日一日を大切にしたい。(慈済月刊六一八期より)

●慈済が設立したサービスセンターは、住民が思いを訴え、災害情報を報告する場となった。ボランティアは、被災者支援の過程で言葉の壁にぶつかった時、地元の人に通訳ボランティアに参加してもらったことを題材にした寸劇を演じた。

(撮影・王賢煌)



蘇生と再生 環境保全を広める

◎文・辺静 撮影・蕭耀華 訳・本諦

十年前に、四川には慈済のボランティアはいなかった。
十年後に、田舎や都会で、
慈済のボランティアは両手で百本以上の大木を回収した。
同時に自分を変え、他人に影響を与える善良な人となった。



四川大地震の後、被災者は家の修繕ロ
ーンを抱えているため、若い人は田舎を
離れ、都市部へ出稼ぎに行き、老人ばか
りが家に残された。十年前に起きた地震
を契機に、これらのお年寄りは自分たち
の住む場所を護るために力を注ぎ始めた。

漢旺のシルバー族は田舎を愛する

十年は人の人生にとって決して長くは
ないが、四川の田舎で十年間環境保全を
続けてきたことは決して簡単ではない。

山に囲まれた徳陽綿竹市の漢旺鎮青龍
村は、鳥のさえずりと花の香りに包まれ

ている。漢旺鎮在住の任時香さんは、当
時の環境は今とかなり大きな差があつ
て、全く違ったものだと話した。当時用
水路や住宅の回りはゴミだらけで、至る
所が汚かった。今きれいになったのは、
環境保全のボランティアと大きな関係が
あるのだそう。

村民の杜国元さんは今年八十四歳で、
十年前に地震で家が壊れた。木造の小屋
に住み、建て直しを待っていた彼は、漢
旺の土地に踏み入れた慈済のボランティ
アの後について、環境保全活動を今まで
やり続けてきた。

「以前はたくさん病気を患っていま

したが、環境保全を始めてから体は徐々
に丈夫になってきました。環境保全は良
いことで、地球を守ることだと理解して
から、ますますこの仕事を好きになりま
した」と杜老爺さんは言った。最初は破
壊された大地を見て悲しんでいたが、環
境保全活動をやっているうちに、違った
気持ちになり、家族の人にまで影響を与
えたのだった。

徳陽市で勤めている息子と孫は、年寄
りの母親が楽しんでボランティアをして
いるのを応援しようと、毎週仕事場から
回収物をもらって帰っている。孫娘は祖
母の行動に誇りを持って、事務所の同僚

にお爺さんとお婆さんが資源回収をして
いる話を見ると、皆が回収物を持ってく
るようになった。

七十六歳の杜さんと奥さん、それに
六十七歳の妹さん、七十六歳の姑は皆村
の環境保全ステーションを広める素晴ら
しい相棒だ。奥さんは最初心配していた
が、徐々に体が丈夫になり、気分もよく
なったのを見て、最後には一緒について
来たと言う。

杜爺さん一家はこの村の人々に影響を
与え、環境保全活動のボランティアの人
数は二十人になった。それに二千人以上
の村の住民のほとんどが資源を回収して

いる。毎週の環境保全の日には朝の七時から午後の二時まで働かなければならない。

洛水環境保護ステーションは
わが家だ

漢旺鎮から近い洛水鎮は徳陽什邡市に属している。その中で十年間も慈済で環境保全のボランティアをやり続けている人たちがいる。毎週水曜日の夜は菜蔬地区で夜間環境保全をするほか、毎週金曜日の午後の作業は二時から始まり、二人の師兄が二台の電動三輪車に乗り、回収物を載せ、洛水鎮の地区、街道、店舗

を回っている。

曾令華師兄は環境保全ステーションを自宅のように毎日回り、回収物の整理や掃除を確認している。毎日のように環境保全ステーションをきれいにし、訪問に来た人々に環境保全ステーションに対する認識を変えてもらおうとしている。

九年間の環境保全の道は、曾令華さんにとっては当たり前のことなのだそう。だ。「自ら進んでやる。嬉しく受け入れる。正しい事とはにかく実行すること。これは自分のやるべき事です」と言う。奥さんの羅鳳萍さんは、「物の命を大切にし、性格的にも落ち着いてきました。前は粗野だったけれど、今は分類の仕事を楽し

くやっているし、心も穏やかになりました」と話してくれた。

羅鳳萍さんはよく洛水サービスセンターでボランティアの面倒を見、訪問者の応対もしている。同時に曾令華さんは後ろの環境保全ステーションで忙しい。夫婦二人は洛水にある慈済の家を毎日にごやかに活気づけている。

以前、洛水環境保全ステーションの設備は古くて簡易的なものだった。現在、改築中だが、住民達は熱心に資源分類に集まる。
(慈済月刊六一八期より)

●84歳の杜国元さんと妹は環境保全に熱心に取り組んでいる。「生きている限りは毎日続けたい」と話す。



プラスチックをエコ毛布に エコ産業で生活の安定を図る

◎文・辺静 撮影・蕭耀華 訳・惟明

十年前、四川大地震の被災者は慈済が贈呈したエコ毛布で、地震後初冬の寒さをしのいだ。その温かさが残っている現在、彼らは今度は自分の手でエコ毛布をつくり、さらに多くの故郷の人々に贈っている。



●エコ毛布の生地を裁断する成都大愛感恩環保科技社の職員

――〇〇八年、四川大地震が発生した

三日目、慈済ボランティアは被害状況を視察するために四川に到着した。被害が甚大な綿竹市、什邡市に行き、被災者の「身の安全、心の安静、生活の安定」「三安」原則）を守るために、炊き出しをしたり、無料診療を行った。成都市から七十キロを離れた什邡市は十年前の四川大地震でもっともダメージを受けた場所であり、一連の救助活動の中で慈済ボランティアがもっとも力を入れた場所でもあった。

慈済ボランティアが「三安」原則の「生活の安定」を果たせるように、二〇一〇

年十月から人文教養、環境保全、資源の回収とリサイクルを一体化した什邡大愛感恩環保科技有限会社が設立された。この会社は営利目的ではなく、資源の回収、リサイクルのノウハウと慈済が世界中に後押ししている環境保全の経験をここに結集し、環境保全教育を押し広げることが目的として設立された。

従業員の多くは地元什邡市か近くの徳陽市の住民だ。彼らは出稼ぎをしなくてもよくなったので、家族の面倒を見、親孝行をし、子供の成長に寄り添う時間が多く作れたと同時に、環境問題をさらに理解し勉強することができた。

故郷に戻り、生活を

什邡大愛感恩環保科技有限会社に勤務している人達の大半が、ここに就職する前には出稼ぎをしていたと人事部の閻鵬（えんぽう）が言った。冉秀雲（ぜんしゅううん）もその一人だった。彼女は以前、成都と什邡で仕事を掛け持ちしていたため、家には週に一回しか帰れなかった。

「今の職場は家から近いので、私は毎日退社後の時間を家族と一緒に過ごせるようになりました」。両親はだんだん年をとり、子供が成長している。冉秀雲は彼らと一緒にいる時間は大切に、幸せだ

と思っている。「両親といられる時間も、子供が私を必要とする時間も、限られています。この限られた時間に家族といられることを、とてもありがたく思っています」

当初は単純に家に近い職場を探そうと思っていた。大愛感恩環保科技社が地震後にできて、善事をしていることを知り、就職した。いざ入社してみたら、いろいろな収穫があった。彼女がとくに感銘を受けたのは、「都市のマイニング資源」という社内運動に参加し、廃棄した電子、電気部品を回収して分解処理することだった。



●環境保全ボランティアは成都の金堂環境保全ステーションに集まり、プラスチックの分類を手伝っている。四川大地震の後、慈済は救援を最優先にした。その後は、環境保全を後押しし、住民達は少しずつ地震の影に別れを告げ、新たな生活の重心を見つけた。

「私達が日常生活の消耗品を雑に処理することが環境にどれだけ大きなダメージを与えているかということを教わりました。環境保全のような先進的な産業に参加できたことはいい因縁だと思っています。使い古した電子製品の回収とリサイクルが、

鉱石の採掘を減することにつながります。さらに大事なのは消費の観念を変え、ひたすら最新式の電子製品を追わないように周りの人々にも知らせるべきだと思いました」

学んだら実行に移すべき。秀雲は環境保全の考えを家でも実践している。「以前は環境問題について何も知りませんでした。自分と他人が作ったゴミが大気と水源にダメージを与えていることを知ってから、無駄な買い物を少なくしたり、ゴミをきちんと分類したりすることなど、私ができることを率先的に始めました」

企業経営に人文教養を組み入れ、従業員の技術と専門知識だけではなく、個人の教養をも向上させた。入社七年目、冉秀雲は成長した。その変化は家族の目にも映っている。「私が大愛で働くことを家族は応援してくれています。私の性格もよくなりました。家族に自ら謝る勇氣を持てるようになり、家中の雰囲気も穏やかになりました」

大愛で働いた七年間を振り返ってみると、彼女は「物質的な生活のためだったらよそで働いた方が良くと思います。精神的な生活のためにいえばここよりいい職場はありません」と話した。

● 慈済は冬の救助物資の配付活動を中国各地で続々と展開した。防寒のためのエコ毛布は必需品で、四川成都大愛感恩環保科技社が急ピッチで生産している。（撮影・辺静）

回収、リサイクル

二〇一八年三月まで、什邡大愛感恩環保科技有限会社を訪問した人は六万人を超えている。使い古した物資がどのように処理されるのか、人々はこれらの問題にあまり関心を持っていなかった。ここで理解したことは、ゴミを勝手に捨ててはいけないことのほか、日々の生活から出たゴミの分類、資源回収を徹底すれば、自分の力でも地球環境を守れるということ

とだった。

成都大愛感恩環保科技は二〇一七年、本格的な生産を開始した。プラスチックのリサイクルに力を入れ、回収したペットボトルを原料にエコ毛布の生地を生産している。二〇一七年の冬、慈済が中国各地で配付した毛布の大半は、成都大愛感恩環保科技社が生産した。この年、同社はエコ毛布を二万枚以上生産した。

成都市金堂県の冬季配付活動の当日、成都大愛の全職員が参加した。「筋肉痛で全身が痛かったけれど、故郷の人々の笑顔が見られるだけで幸せでした」と、職員の饒雪^{じょうせう}さんは語る。配付の時に目に

する人々の幸せそうな笑顔、家庭訪問ケア中に出合った感動的な出来事など、十分な収穫が得られたと思っている。

感動が響き回る

成都大愛感恩環保科技社の本社は成都市金堂県淮口鎮に位置しており、リサイクル活動を地域社会に広げるために、多くの環境保全ボランティアを集めた。最年長のボランティアは八十六歳になった葉秀春おばあちゃんだ。資源回収はいいことだと聞くと、毎日買い物袋を持って、路上や市場に捨てられた資源を回収





し回っている。

「あなたはキリスト教徒なのに、どうして仏教徒と一緒に環境保全の活動をするの」とおばあちゃんに聞いた人がいた。「私がキリストを信じるのは、彼が人々を自分の子供のように愛しているからです。キリストか仏教かは関係なく、大事なものは優しい心を持つことと、人に優しくすることなのです」とおばあちゃんは思っているとおりに答えた。

店員の曾さんはおばあちゃんに取りにくる前に、リサイクルできそうな物資を箱詰めして、準備している。「社会のためになることをするのは、私達にも責任

がありますから」

会社はそこで働いている人間にとつて、家を除いて日々一番長く過ごしている場所だ。会社が家のような居心地のいい場所になれば、従業員たちは楽しく働けるだけではなく、その家族も安心してそこで働かせることができる。また、最大の成果は地域の住民たちにやる気を起こさせて、皆で住居環境を守るといふことだ。

（慈済月刊六一八期より）

●86歳になった葉秀春は敬虔なキリスト教徒で、人を愛し、大地を愛している。金堂県淮口鎮の道端で、マージャンをしている人々の間を縫うように歩き、リサイクルのできる物資を拾い集めている。



【證嚴法師のお諭し】

心の方向を定め、
衆生を成就させる

◎訳・慈願 絵・林淑女



仏法を日常生活の中に定着させ、真理を人、事、物と結合させることは

自分の人生の方向を肯定することであり、

人々を同じ方向に導くこともできる。

今年の五月九日、すなわち旧暦三月

二十四日、慈濟は五十二周年を迎え、

五十三年目に向かって歩み出しました。

五十二年前、静思精舎の裏にある普明

寺の小さな本殿で、数人の人たちと「仏

教克难慈済功德会」を創設しました。

竹筒歲月もその時に始まり、会員が毎

月五元、十元、二十元などを寄付して

貧困救済を行いました。

数人の専業主婦は自分を変えてから

家族に感動を与え、そこから一家で慈

善活動するようになりましたが、その

風潮は徐々に社会に定着するようにな

りました。慈善、医療、教育、人文の

どれを取っても、一個のレンガ、一袋

のセメント、一本の鉄筋にいたるまで、

四大志業のハードウェアが完成して、機能を發揮することができたのもすべて一分一秒、一滴一滴の蓄積であると同時に、善念の累積と愛の心が福をもたらした結果です。

広い心をもって力を集結させれば、愛のエネルギーを發揮することができます。台湾は善と愛を宝としており、この半世紀、慈済は台湾を起点に世界の百近い国と地域で慈善救済を行っており、五十七の国と地域で慈済志業を發展させながら愛の種を撒いてきました。一から無量が生まれるのです。人は皆、命の光を輝かせて人助けをするこ

とができます。この世は輝く星でいっぱいなのです。

旧暦の三月に入ってから、各地の慈済人が五十二周年記念の参拝のために帰って来て、心霊の大道に向かって精進し、一步一歩着実に邁進していました。毎日のように整然と威儀を正して参拝した行列が見受けられ、人々は、身心共に敬虔で法悦に満ちていました。

ボランティアたちは法の香りに浸った感想と生活の中に法を取り入れた時の感動を皆と共有していました。真理が人、事、物と融合し、聴いた法を心

に留めて感じたことを話すことで自己の生命の方向を肯定すると共に、他人を同じ方向に導くこともできるのです。これが法を伝承するということです。

今年五月の第二日曜日、慈済は三節一併活動「母の日、お釈迦様の生誕、世界慈済デー」を祝いました。世界三十以上の国と地域で、五百回もの灌仏会が催され、数十万人が心を一つにして、敬虔に社会の平安を祈りました。フィリピン・オーモックの慈済大愛村で参拝と灌仏会活動が行われましたが、ある村人は大きなバナナの房を持って三步一拝礼の列に参加していました。

彼は自分で植えたバナナを法師に献じたいと言いました。私は彼らと面識はありませんが、慈済がハイエン台風の支援をしてくれたことに感謝して、慈済への感謝と祝福の気持ちから花やおこわを持つてきました。

式典が行われるまで連日午後になると大雨が降り、灌仏会の会場がぬかるんでいたため、村の若者たちが地面を整え、ペットボトルの蓋を地面において隊列配置の目印にしていました。活動中、子供たちが摘んできた花を母親たちに捧げ、抱擁しているシーンを見て心が温まりました。

台湾の中正記念堂で行われる灌仏会は、毎年異なる模様を描き出すため、一人ひとりが協調しなければなりません。各自が心をつにするだけでなく、「調和」で以て隣の人に、互いの存在があつてこそ大きな事を成すことができるのだ、と感謝するのです。

百四十数名の長老と法師たちが灌仏会の式典に参加され、身を以て導かれた故に、会場の雰囲気荘厳と和みに満ち、人々に仏法の真、善、美を見せることができたことに、心から感謝と讃美を表します。

各地で行われている灌仏会の式典で

は、信仰を問わず互いに尊重し合い、宗教間の和合を示すと共に、大衆に善行と孝行は「待てない」ことを呼びかけています。そして、灌仏会の日だけ真心を表すのではなく、日々孝行、善行、礼儀を着実に行わなければなりません。

時間は情け容赦なく過ぎる。

人間菩薩は愛を携えて

一念を永遠に保ち続け、

無数の人が苦しみから逃れ、

安楽になる手助けをする。

十三年前の五月第二日曜日に台北慈

済病院が開業し、海外からの慈済人は三節句活動に参加しただけでなく、その機会に医療志業の発展を目の当たりにしました。その日は喜びに溢れていました。

台北慈済病院建設の過程で、多くの慈誠隊員が作業員として工事の仕事を担い、地下の基礎作りから一階ずつ最上階に至るまで手伝いました。工事現場は重労働の上、風雨に晒された時は持ち場を忠実に守っていました。

建物が完成すると、ボランティアたちは太陽の照りつける屋外も厭わず、病院の内外を隅々まで清掃しました。

そして続けて、病院内の配置に精を出し、無から有が生じたのは全て愛に満ちていたからです。

先日、北区の慈誠隊大隊長の黎逢時が、慈誠隊員を連れて精舎に帰った時、人や車の安全を確保するため、台北慈済病院の敷地で新たに連結ブロックを敷き直していました。そして、すでに準備はできており、診察にくる民衆の出入りや交通には影響しませんと報告しました。

四月中旬から工事は段階的に進められました。四月二十八日には八十人以上の病院スタッフと家族が参加して敷

き直すために用いる古いブロックの洗浄を行いました。趙有誠院長は、参加することで大変さを知り、互いに感謝し合えるのだと言いました。

十年前に、地面を掘って一個一個ブロックを敷いたのは大変な苦労だったと思います。その時のボランティアたちは中年か壮年でしたが、時間、体力や財力を奉仕して、ただ志業の成就、人命救助、生命の守護の為に人生を奉仕していました。

今、彼らは白髪頭になっていますが、歴史の証人なのです。菩薩道を歩み、不動の一念を守って無数の人を苦から

逃れさせ、楽にしてあげました。年を取っても、人生の大半を終えた後でも、まだ時間と体力を充分に利用できるのは、若者たちに負けていない証拠です。

このボランティアたちが日々良能を発揮して、生命の価値を停滞させることなく慧命を成長させていることに感謝しています。有限な人生で時は情け容赦なく過ぎて行きますが、誰もが愛を携えて迷いから目覚めれば、人々に利するためにこの世に來たことと、一刻を争って志業と道業を成就させなければならぬことを認識するでしょう。

志があれば難しいことはなく、着実に菩薩道を切り開く。
愛の奉仕で、
自らの生命を豊かにする

アフリカのスワジランド（今年から国名が「スワティニ王国」となった）の十六歳の男の子シピンレイは先天的な奇形児で、腹這いで地面を移動するしかありません。祖母と二人暮らしでしたが、祖母は年を取り、生活を維持していくのが難しい状態でした。それはとても気の毒な人生ですが、慈済ボランティアが長期間、関心をもって世

話していることに感謝します。先日訪問したボランティアは、彼が長い間、体を洗っていないことに気づきました。体を洗ってから清潔な服を着せられた彼は、笑顔で感謝を表しました。

慈済志業がアフリカ南部で始まったのは、南アフリカの台湾人ビジネスメンたちが「現地で得た物は、現地に還元する」理念に基づいて、慈善に投入したからです。彼らは民族間の対立や社会動乱が起きた時も勇敢に奉仕しました。二十年あまりの間に現地ボランティアを養成しました。愛の種子は大きく実り、今では国境を越えて仏法を

広めています。スワジランドのボランティアは正に彼らの指導の下に現地地志業を担っています。

スワジランドの慈済事務所は六年前に開設されましたが、慈済地域センターへ通じる道はぬかるんで歩行が困難でした。一年前、現地のマレーシア実業家肅清順居士は現地ボランティアの苦勞を見かねて道路を平坦な石の道に作り替えたため、「スワジランド菩薩道」とボランティアたちは呼びました。

今年の三月中旬、第五回スワジランド現地人幹部研修会が行われました。一時間目の「慈済行儀作法」では、

現地ボランティアの本戒師兄が崇高な牧師の身分でありながら、喜んで正否両面の教材で模範を示していました。彼は心して威儀を学び、規律正しく心して人に教えることを学んでいました。

ボランティアたちは各自鍋や食材を持参して、活動に参加した団員に食事を提供しました。前日の大雨で薪が湿っていたため、家族に調理用の乾いた薪を持ってくるよう頼んでいました。コミュニティセンターの水源は雨水を貯めたもので、ボランティアたちは何度も水を汲んできて、野外厨房で料

理しました。彼らは自力更生で困難を抱えながらも、やる気さえあれば困難なことはなく、喜びに満ちて活動を終えた後、満足感を味わいました。

現地ボランティアは心の声を歌にしました。「法師は私たちを導いて至る所で大愛を広め、私たちは台湾へ行つて法師に追随しよう」。彼らは慈済精神と愛のエネルギーを伝承して、スワジランドで着実に道を切り開いたのです。彼らが心して信じて着実に奉仕し、師の志を受け継いで法髓を伝承し、福田を耕して貧困から抜け出すことで心が豊かになり、自らの生命を豊かにしていることに感謝しています。

聴くだけでは
仏道から遠ざかってしまう
法を聞いたら体で実践し、
一切の妙理を理解すれば
仏道に近づく

人は日頃から知識があつて初めて生活ができ、さらに智慧を高めることによって道理を理解するようになります。道理が分かれば、清らかな心に回帰することが出来ます。そして、清らかな心が増えた分だけ力が増し、煩惱や無明を取り除くことができるのです。

智とは「分別智」、慧とは「平等慧」のことです。周りが暗闇であれば、状

況が分かりません。しかし、たった一つでも明かりがあれば、自然に情景を見極めることができ、平地なのか、溝があるのか、ぬかるみなのか、乾いているのか、はつきりと見えて進む道が分るのです。

たとえ弱い灯りであっても、おぼろげに方向を見い出すことができます。もし、明かりがさらに強く、至る所を照らすことができれば、もつとはつきりと見え、高低や遠近が一目瞭然となり、その境地にもつと深く入り込めば、より細かく感受することができるようになります。

「照見名智，解了称慧」とは、内心が

智慧の光に満ちていれば、一切の妙理が解るといことです。もし、ただ聴くだけなら道理から遠くかけ離れたままです。身を以て実践して初めて、道理に接近することができ、道とは通って初めて通じるものです。ですから法は聞いてから日常生活の中で活用する必要があります。

凡夫の煩惱無明は消すよりも増えることの方が多く、たとえ法を聞いても疑問をもつてしまいます。「なぜ道理が理解できないのでしょうか」。それは過去に積み重ねてきた習気が障害になっているからです。凡夫は自分に好意的

な人とそうでない人がいるのを感じ取ります。もし、いつも好意的であった人が一度でもあなたの心情を害した時、過去の恩や徳は消えてなくなり、目の前の怨念だけが心に残るのです。

煩惱に汚染されたら、速やかに法を用いれば、法は水のように穢れを洗い流してくれます。人の性が平等だと分かれば、互いに尊重し合い、「この人は今日どうしてこうなのか？」というような細かいことを気にせず、「以前は良い点が多かった」と善に解釈し、「過ぎたことを放下」すれば恨みや嫌なことはなくなります。

「本性は元々清らかなものでも、諸々

の垢に染められた時は、法の智慧を以て、洗い流す、これを静思惟という」とあるように、常に思惟に法があれば、心が乱れることはなく、逆境にあった時に応用することができるようになります。よく言われるように、修行とは、習気を改めることであり、「習」とはすなわち、智慧の法水を用いて過去の習気を洗い流し、「法を日常生活に取り入れ、人や物事に対して理に適った対処をする」習慣を身につけることなのです。「学」と「覚」の二文字は似通っていますが、真面目に学習すれば悟りを開く機会が訪れます。皆さん、心して学びましょう。

（慈濟月刊六一九期より）

お節介の道理……人助けのアプリ 推薦篇



私たちの社会には、もつと多くの「お節介な人」、

とくに道理が通っていて、礼儀と智慧を身につけたお節介な人が必要なのです。

それも人々の心を温めてくれるだけでなく、

間違った価値観を持つている人に、目を覚まさせる効果をもたらす人です。

二十年以上前、アメリカの大学に留学

し博士課程で学んでいた学生は、慈済現

象について論文を書くため、静思精舍を

訪問し、毎日他の人たちと一緒に寝起き

しました。アメリカに戻る際、「なぜこの

おばさんたちの力で、慈済病院が建てられ

たのか、やっと分かりました。もし博士た

ちだったら、成し遂げられなかったかもしれ

ません」と彼は感慨深げに語りました。

彼の話は五十二年間の慈済にその全貌を

見ることが出来ます。

ふり返ってみると、「慈済功德会」が創

設された頃の台湾女性の知識と経済力は

高くありませんでしたが、三十人の専業主

婦が證嚴法師に追随し、毎日五十銭を貯金

する小さな善行に始まり、女性の慈しみと

優しい心を市場から社会各地に広げてい

きました。自分たちの生きがいを見つけた

だけでなく、知らず知らずのうちに、その

細い流れが、現在では全世界に広がる大愛

の巨大な流れとなりました。

近年「人助けの心理学」に関する議論で、

女性特有の道德観が重視されています。そ

れは、人と人との間の暖かさと安心感、そ

して互いに支え合う責任意識に基づいて

いるものです。慈済のおばさんたちは知ら

ず知らずのうちに私たちを時代の流れに

乗せてくれたのです。

慈済の慈善志業は四大志業八大法印が

発端ですが、證嚴法師の「慈悲心」に起因

した貧困救済に始まりました。「慈善が私

を開眼させてくれました。苦難な人たちと

接していなかったら、世間の苦しみが理解

できなかったでしょう」と證嚴法師は言っ

たことがあります。

そういうわけで、證嚴法師は「慈済」と

いう二文字の意味を次のように解釈して

います。「慈は人を樂にし、悲は苦痛を取



20年以上訪問ケアに携わった経験を持つ19人の慈済ボランティアは、貧困や病に苦しむ家庭に長期的に付き添い、人助けのルールを伝承している。

作者・李委煌、黄秀花、邱如蓮、鄭雅嫻、張国雄
発行元・慈済道侶叢書出版
皆様のご支援を歓迎いたします

カスタマーサービス
☎ +886-2-28989000
内線 2145



送付の申し込み・ページへようこそ
<http://web.tzuchiculture.org.tw/index.php?s=3>

り除きます。衆生は物質面だけでなく、精神面でも欠けているはずで。欠けているからこそ、苦しいのです。物質面で不足している人には物を援助し、病に苦しんでい

る人には医療を受けさせますが、心が満たされず、煩惱を持っている人には何を与えればいいでしょうか。愛と仏法です。このように物を与えて生活を助け、愛の心と知

慧で人の心を充実させることができれば、毎日が楽しく、煩惱のない日々を過ごすことが出来るのです」

初期の頃、證嚴法師は六年間、自らボランティアたちを率いてケア対象家庭を訪問していました。苦勞を厭わず貧困家庭を訪問し、支援を必要としている状況を理解しました。さらに貧困の原因を究明すると共に、ボランティアたちに支援を行う手順と方法を教えました。生活が改善された後は、今度は掌を下に向けて人助けするよう励ますのです。慈済の慈善は證嚴法師自らが一步一步模索してきたものであり、「貧しきを救い、富者になることを教え、富者

を諭して貧しきを助ける」という考え方で慈済独自の慈善の形が定着したのです。

慈済訪問ケアのボランティアは、そのルールに則って、苦難に喘ぐ衆生に深く接し、実践することで豊富な経験を積み、自己向上させながら改善し、無私の心で得た経験のすべてを伝承してきました。この本の主人公の訪問ケアに関する受け答えを見ると、人の話をよく聞いて理解し、自分の中で理解と整理をするのは理論的にも合致しています。それは豊富な人生経験と精進して学んだ真髓と言え、人への接し方や処世術、人助けのテクニクの宝と言えるものです。

清華大學社會學大學院的張維安教授は

「社会の底辺から湧き起こる改善力」という文章に、「慈濟人は『酵素』のように地域社会の中で発酵し、素朴で日常的な形で、長期的に社会の底辺で改善の力を発揮しています。そのエネルギーは今の社会における文化の危機に対する希望となっているのです」と書いています。

その通りです。慈濟人は「酵素」のように、自主的に人々が必要としている所に現れ、苦勞も困難も厭わず、いつも愛をこの社会で発酵させているのです。ボランティアの陳朱定さんが本の中に「面倒を厭わず、何事に対しても少しばかりお節介にならな

くてはいけません」と書いています。

確かに私たちの社会にはもつと多くの「お節介な人」、とくに道理が通っていて、礼儀と知恵を身につけた人が必要なのです。それも人々の心を温めてくれるだけでなく、間違った価値観を持っている人を目を覚まさせる効果をもたらす人です。この点に関して読者の皆さんは『難婆有理・助人心法APP（お節介の道理・人助けのアプリ）』という本から徐々に理解していったほしいと思います。

（慈濟月刊六一五期より）



善の扉 「慈濟ものがたり」をご自宅までお届けします

各慈濟連絡所では無料でお配りしています。

ご自宅までお届けする場合の郵送料は年間NT\$120。

2冊以上ご希望の方は読者サービスセンターにお電話ください
日本に在住されている方は慈濟基金会日本支部にご連絡ください

●郵送料のお振込み：（月1回発行。1冊）

台湾郵局口座：19905781 口座名：慈濟傳播人文基金會

●読者サービスセンター電話番号：

02-28989000内線1165

●上記の郵送料は台湾国内に限りです。

海外または離島の方は読者サービスセンターにお電話ください。

●インターネットでもご覧いただけます。

URL <http://web.tzuchiculture.org.tw/index.php?s=7>

オンラインでの送付
申し込みはこちらへ



慈濟大記事六月……………

訳・済運

06・01	慈濟科技大学主催の「2018全国健康と管理実務に関する研討会及び主題弁論会」が開かれた。「健康促進」と「医療管理」をテーマに、台湾全土の大学生を招いて学習成果の発表が行われると共に、産官学の間で討論を行うことで理論と実務を身に付けさせ、教師と学生の専門能力を引き上げるのが目的である。今回は10校14の学部から51組の学生が参加した。
06・02	◎慈濟基金会は内政部移民署中区事務大隊南投県事務所、南投県政府社会及び労働处等と合同で、慈濟南投事務所「臨時労働者ケア・端午の

06・03	節句に精進粽」活動を催し、100人近い日雇い労働者に精進粽と果物を配付すると共に歌謡ショーの催しと無料散髪、血圧測定を行った。 ◎花蓮慈濟病院は第2回「最先端放射線治療国際討論会」を催し、日本放射線治療専門家を招いて重粒子治療と最新研究についての講演を行った。討論会では花蓮慈濟病院と大阪重粒子センターが医療人員の交流と訓練、治療のための患者の紹介、研究成果の共有に関する覚書を交わした。
	アメリカ、ハワイ島のキラウエア火山は5月からの噴火で溶岩が住宅地に流れ、住民数千人が緊急避難した。慈濟ハワイ支部はケア活動を展開し、3日にパホア地区センターに設置された避難所で治療を行うと共に、炊出しと毛布の配付を行なった。4日には軍隊と警察、民間防災関係者に感謝の贈呈を行なった。

06・08	
	療模範賞」の授与式が行われた。花蓮慈濟病院国際医療奉仕センターが光栄にも団体賞を獲得した。 ◎アメリカ、フランス、ドイツ、イギリス、スイスから集まった慈濟ボランティア14人は2017年ポルトガル中北部森林火災慰問団を結成し、8日、オリヴェラ市で被災状況を視察した。10日にはトンデラ市で101世帯に2回目の物資交換券を配付する。 ◎慈濟基金会は第1回「FUN視野を広げて未来を考える・青年公益実践計画」活動を行った。台北市西門町紅樓で計画の選抜を行い、10の団体が計画内容と運営方針を報告し、それを教育部青年發展署の羅清水署長、台灣公益団体自律連盟の馮燕常務理事、慈濟基金會の顏博文執行長など経済、政府、学問の分野の人たちが審査員となって質問するなどした。

06・05	06・04
衛生福利部の指導の下に国際医療衛生促進協会主催の「第3回国際医	◎3日、グアテマラ、フエゴ火山が爆発し、多数の死傷者を出した。グアテマラ慈濟ボランティアは4日、エサクイントラ州ホセマルティ公立学校を訪れ、避難住民250人に炊出しを行った。14日には国家緊急救難センターの要請でカルロス技術学校で300食の炊出しを行う。 ◎慈濟インドネシア支部はイスラム教協会と慈善、医療、教育、環境保護に関して協力する由の覚書を交わした。 ◎慈濟インドネシア支部は大統領府執務室の要請を受けて、仏教代表組織と協力してウエサクフェスティバルを催し、前大統領及び現副大統領、100人余りの僧侶、各宗教界の長老など約2000人が出席し、慈濟とイスラム教協会が覚書を交わすのを見届けた。

06・27	2017年9月、花蓮で落石に直撃されて、亡くなった日本人サイクリストの白井寛さんの父親の白井良一氏が23日、花蓮慈濟病院を訪れ、息子の最後を世話してくれた医療チームとボランティア及びサイクリング仲間に感謝の意を表した。白井氏は24日、花蓮慈濟病院サイクリングクラブのメンバーの付き添いの下に、息子の遺影を持ってMaxxis 太魯閣国際登山サイクリング競技会に参加し、息子の夢をかなえる予定である。
06・27	「2018国連難民高等弁務室及びNGO年次総会が27日から29日に開かれ、慈濟基金会から6人が代表で参加する。慈濟は世界での難民ケアを報告すると共に、National Strengthening System論壇に於いて補佐役を担当する。

06・11	花蓮慈濟病院は癌患者に対して正確な治療を行うために、日本国立放射線医学研究所と患者の紹介及び医療人員の訓練、研究成果の共有等交流する由の覚書きを交わした。
06・17	オーストリア、ウィーンの慈濟ボランティアはセルビア国内に留まっている難民の子供たちに文房具を寄付するために、精進粽を作り、チャリティー販売活動を始めた。
06・19	慈濟基金会は花蓮県玉里鎮三民中学校の校舎を再建することになったが、本日、花蓮県教育処の劉美珍処長と三民中学校の鄭健民校長、慈濟基金会林碧玉副執行長らが出席して「減災希望工程」の起工式が行われた。新校舎は同じ場所に建てられ、事務所、教職員室、6つの教室、図書室、視聴教室、屋根のある運動場などが計画されている。

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈济医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈济病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈济病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈济病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈济病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈济病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
FAX: 886-4-36021123

慈济大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301
FAX: 886-3-8563604

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈济人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ

TEL: 1-760-7686631

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス

TEL: 44-20-88699864

フランス

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈濟

2018年7月18日発行・259号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈济基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈济日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・王麗雪

校閲 山田智美

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈济基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈济に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)



2018年、花蓮での灌仏会

静思精舎の法師の導きの下に、花蓮静思堂前の広場に集まった3000人以上の人が「礼仏足」や「接花香」の動作で「仏様の生誕祝い、母の日、慈済デー」の3つの節句を祝い、この世の幸福を祈った。

中央の仏像は水の波紋が至る所に及ぶ地球に立つ。1000本の回収ペットボトルを使用して作製された「水立方」は、水を金のように大切にすることを象徴し、水資源を無駄にしないよう訴えている。（撮影・徐政裕）



慈済ものがたり